

NY生活クリニック 週刊NY生活 07/2006

小児ぜんそくの治療にカイロ

小児ぜんそくは現代社会で最も多い小児慢性疾患で、発病率は年々増加の一途をたどっています。患者の80～90%が5歳以内に発病し、治療過誤による死亡率も高い病気です。従来の医学でははっきりした原因は解明されていません。最近の調査では妊娠中の抗生物質の使用や帝王切開による出産も影響を問われています。治療法は症状によって鎮咳剤、去痰剤、気管支拡張剤、抗生物質、鎮喘剤などが処方されますが、いずれも対症療法に過ぎず、根本治療するものではありません。

免疫システムは脳をはじめとする中枢神経によってコントロールされています。カイロ学では免疫力の低下やアレルギー反応、ぜんそくなどのほとんどの症状は、中枢神経と免疫器官とのコミュニケーションが何らかの外因によって妨げられることが原因で引き起こされると考えています。

JVSR(Journal of Vertebral Subluxation Research)の調査で、小児ぜんそくの患者81人に60日間のカイロ治療を行ったところ、66.5%の子供の薬物使用が減り、44.9%の子供の発作が減少したという結果が出ています。治療前のX線検査ではほとんどの子供の第二仙骨、後頭部または上部頸椎に変位が見られました。これらが自律神経に影響を与え、ぜんそくを引き起こしたと考えられ、変位した骨を正常な位置に戻すこと(アジャストメント)によってぜんそくの症状が改善されました。単に症状を抑えるだけの薬物治療と違い、人間の体が本来あるべき正常な状態に戻してあげるのがカイロ治療だと考えてください。